2026

紀伊國屋じんぶん大賞

読者と選ぶ人文書ベスト30

大賞受賞

千葉雅也さん
書評
「フラットになることが前衛だった頃」
全文掲載

TAKE FREE

垂直ではなく、
水平だけでもない、斜めへ。

千葉雅也 問いは斜めに飛躍し、想定外のところに不時着してもいいはずだ。

東畑開人 上空から俯瞰して、現代メンタルヘルスケアを一望する傑作。

三宅香帆 この名著は、21世紀の精神を分析する上で必読書になる、と思う。

筑摩書房

ケアは、どうひらかれたのか？

自己実現や乗り越えること、あるいは精神分析による自己の掘り下げを特徴とする「垂直」方向と、自助グループや居場所型デイケアなど、隣人とかかわっていくことを重視する「水平」方向。

二〇世紀が「垂直」の世紀だとすれば、今世紀は「水平」、そしてそこに「ちょっとした垂直性」を加えた「斜め」へと、パラダイムがシフトしていく時代と言える。

本書は、ビンスワンガー、中井久夫、上野千鶴子、信田さよ子、当事者研究、ガタリ、ウリ、ラカン、ハイデガーらの議論をもとに、精神病理学とそれにかかわる人間観の変遷を跡付け、「斜め」の理論をひらいていこうとする試みである。

著者は、二〇一五年のデビュー作『人はみな妄想する』でラカン像を刷新し、國分功一郎、千葉雅也の両氏に絶賛された気鋭の精神医学者。

紀伊國屋じんぶん大賞２０２６を受賞、今年最高の人文書がここに。

写真＝北原千恵美

松本 卓也（まつもと・たくや）

1983年、高知県生まれ。2008年3月、高知大学医学部医学科卒。2015年3月、自治医科大学大学院医学研究科修了、博士（医学）。2016年4月より、京都大学大学院人間・環境学研究科総合人間学部准教授。研究分野は、精神病理学、精神分析学、精神医学史、病跡学、フランス現代思想。著作に『人はみな妄想する』（青土社）、『心の病気ってなんだろう？』（平凡社）、『創造と狂気の歴史――プラトンからドゥルーズまで』（講談社）、『享楽社会論――現代ラカン派の展開』（人文書院）、『ジャック・ラカン――フロイトへの回帰』（岩波書店）。翻訳に『現実界に向かって――ジャック=アラン・ミレール入門』（人文書院）、共訳にダリアン・リーダー『ハンズ――手の精神史』（左右社）、ヤニス・スタヴラカキス『ラカニアン・レフト―ラカン派精神分析と政治理論』（岩波書店）、共編著に『コモンの「自治」論』（集英社）など。

◀◀◀◀◀

次のページからは千葉雅也さんによる『斜め論』の書評や、
あわせて読むことでさらに『斜め論』が楽しめる、
著者がセレクトしたブックガイドを掲載。
ぜひお楽しみください。

フラットになることが前衛だった頃

千葉雅也

本書で言われる「斜め論」とは、水平性と垂直性を共に考えることである。

ここで、水平性とは、民主的、対等であること、いわばフラットな関係。それに対して垂直性とは、規範的なもの、権力的な不均衡など。

まず、垂直批判。高きに位置するもの＝規範や権威を仰ぐことが、または深さを追求して掘り下げるといったことが、大まかに言って伝統的には「偉い」ことだとされてきたわけだが、そうではない方向へ。すなわち、水平方向に、フラットに展開する関係性を多様に開いていく。そういう方向性が、我々の世代にとって重要だった。というか、本格的にその新しさを推し進めたのはこの世代、いわゆる氷河期世代・ロスジェネの前後だと思っている。それが90年代以後の変化だった。

自分は97年に大学入学だが、ずいぶんと人を突き放す言葉を平気で言う年長者がおり、そのほうが主流なくらいだったと思う。そういう環境での修行――「修業」というより――をある程度は受け入れながら、反発を示すこともあった。そのなかで、これからの時代は、より対話重視でフラットでインタラクティブなあり方を広げていくんだという意志があった。少なくともそのつもりだったという想起だが、そうした関係性（水平的と言えるような）が普通であるようにしたいという願いを持ちながら生活してきた。それは小さなアクティヴィズムだったかもしれない。

松本さんとは少しの年齢差があるが、前後の幅を含めたこの世代あたりが、権威や深さを優先する、保守主義でもラディカリズムでもあるもの（両極はときに連動している）への抵抗を様々に試みてきた。

80年代には、高さ・深さからただの表面へ、というポストモダン的価値転倒が流行したわけだが、それは、旧来的なものを鈍重だとして退けるマウンティングとなり、それがまた文化的分断を生んだのだった。結局、フラットな方向へということが、逆説的に権威化する結果にもなった。

90年代から２０００年代にかけての大学時代には、ごく自然に、文化や学術の新たな捉え方、つまり、伝統的な「重いもの」と、ポピュラーカルチャーを横断的・斜め的に行き来する姿勢を教育されたし（中学高校からそういう空気が周囲にあった）、80年代には小学生だったので、そうした傾向が一部の知識人たちによってプロモートされたものだという意識はまったくと言っていいほど持っていなかった。

それゆえに、90年代後半に大学に入り、そういう方向でものを考え書こうとし始めたとき、かつて生じていたらしい「フラット化の権威化」による一種の差別的構図を無批判に引き継ごうとしているかのように、それを嫌う人たちから批判を受けることもあったが、なぜそんなことを言われなければならないのかピンとこなかった。

――という余談から始まってしまったが、本題に入らなければ。

松本さんは本書において、垂直には「おしつけ」、水平には「よこならび」とルビを振って、いずれの難点も検討している。

水平を、フラットになると言い換えるとして、それにはメディア的条件があったと僕は思う。映画・テレビ・ラジオという一方的なマスメディアから、インタラクティブなゲームやパソコンへの転換で

ある。試しに問いかけてみて、そのレスポンスを見て次の展開へとキャッチボールをするといったゲーム性が我々にとって（とラフに一般化させていただくが）コミュニケーションの基本なのだが、これまた世代論を言うと、上の人たちはかなり一方的にしゃべり倒す傾向が強くて、それに圧倒されることもよくある。

――と、これもまた余談。すいません。

さて、本題に入らなければならない。

垂直的「おしつけ」＝パターナリズムではない方向への変化は、20世紀後半から21世紀にかけての大きな流れであった。精神医療が、旧来のパターナリズムを厳しく批判し、改革を経てきたことはよく知られる。68年という年がそのシンボルとなる新左翼運動は、権威主義批判を激しく行った。そこでも、権威主義批判＝フラット化がそれ自体、垂直的追求の隘路に入ったわけだし、またポストモダン的なものの権威化はその反復でもあるだろうし……等々の複雑な事情を考えなければならず、本書には随所にそうした問題意識がある。ともかく、68年の余波が、以後、情報技術に後押しされたグローバル資本主義の大展開と一緒くたになって、諸領域におけるフラット化が進んでいった。

世界がテレビゲームみたいになったらいいのに、と子供心に思っていた。そういう感覚は、とりたててオタク的ということでもなく、新しい空気が生じ始めているなか、多くの同世代が感じていたことだろう。その頃、先鋭的とされる知識人たちがカッコいいカタカナ語を連発していたなどとは知らなかったし、それとは別に、当時を生きた子供の実感として、事物はデジタルの領域と混じり合い始めていたし、またマンガ・アニメ的なはっきりした輪郭性（それもデジタル性の一種だと言えるだろう）を強め始めていたし、ぬかるんだ現実――深みに沈む込むこともある――ではなく、そこ

から遊離したレイヤー＝薄皮一枚において体の半分を生きるようになっていった。

インターネットによって、高さ・深さなき世界はさらに一般化していった。価値、正しさ、倫理、大切にすべきもの――いろいろな言い方があると思うが、それらは単一的ではなくなり、基準は希薄になり、それが多様性と呼ばれることとなり、それによってエンパワーされる実存様態があることも確かだが（自分自身もエンパワーされた一人である）、それと同時に、実に難しいことに、そのエンパワメントと完全に別扱いすることができないだろう新時代のニヒリズムも出てきたと見受けられる。

我々の世代は、すべてがフラットになると、本気では思っていなかったのだろう。それくらい、かつて垂直的なものは重たくて強力だった。それがポストモダン的新地平なんぞで打ち倒されるとは、到底本気で思うはずもなかったのだろう。

だから、垂直性がどこかにあって、それとの拮抗としてフラット化を言い、実践するというのが我々の世代のバランスだった。

ところが、想像を遥かに超えて、フラット化は全面的通俗化となっていった。

それで何が悪いのか、とも言える。そこで渋い顔をしていること自体が、結局保守性そのものではないのかと。

難しい。

我々の世代にしても実は暗黙の前提としていた基準たるべき何かがあまりにも霧散してしまった後に、水平性を言うだけでは不十分ではないかといった問題意識が僕にはある。水平と垂直を、複数性・多様性の時代において、あらためて拮抗させること。

精神医療における水平的展開を代表する「オープンダイアローグ」の実践に関し、松本さんは次

のように述べている。

垂直方向の声に耳を傾けることが、水平方向のダイアローグによって支えられた状況のなかで行われることによって、垂直方向を過剰に権威化させることなく、個人における変容を引き起こすことが可能になる。（42頁）

大変慎重に述べられた一節だと思う。何らかの「変容」がここで示唆されている。それは「個人」のものである。開かれたコミュニケーションによって日常性を回復することがこの療法の主たる効果だが、それだけではない何かが含意されてもいる。

水平性と――拮抗する、と僕ならば言うが、そういう垂直性があり、両方を合わせるなら「斜め」ということになる。

それについて見解をさらに展開することは控えたい。ひとまず、近い世代の一人として、本書を読むときに思った背景を説明したわけだが、それを「おしつける」つもりはなく、しかしそれは「よこならび」のひとつにすぎないわけでもない、ということになるのだろう（という「だろう」で断定を避けること……）。

ぜひ各人の観点で、本書の問いから、何事かに思考をつなげていただければと願っている。本書は必ずしも専門領域に限られた内容ではない。問いは斜めに飛躍し、想定外のところに不時着してもいいはずだ。

※本書評は、２０２５年8月29日に「ｗｅｂちくま」に掲載されたものです。

ドゥルーズは「六八年五月」という出来事について、「ひとつの社会がそこに含まれている何か耐えがたいことを突如として見いだし、さらにはそれとは別の可能性をも見いだした」と評している。それは、『斜め論』の言葉で言えば、垂直から水平へ、そして斜めの可能性の発見である。

具体的な実践におけるそのような「別の可能性」のあり方は、ガタリのなかに、あるいは『勉強の哲学』が提示する「来たるべきバカ」という形象に見出されるだろう。『斜め論』ではそれを垂直と水平のバランスとして論じたが、郡司ペギオ幸夫の天賦の才はそれを「やってくる」ものとして捉えることを可能にする。

『中動態の世界』は、過去を切断することによってはじめて可能になる「意志」というフィクションを暴き、別の主体性を考えようとする。ここには、英雄的な切断によって切り開かれる非日常性よりも、むしろ連続的な「日常性」を重要なものとしてみる視点がある。

拙著『創造と狂気の歴史』は、「創造と狂気」をめぐる眼差しが、非日常的な（切断的な）狂気としての統合失調症をモデルとしていたことを指摘し、そこからの脱却を図るものであり、『斜め論』の兄弟のような位置にある。

ジル・ドゥルーズ（宇野邦一監修）
『ドゥルーズ・コレクション 2 権力／芸術』
河出文庫、2015年

ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ（宇野邦一ほか訳）
『千のプラトー――資本主義と分裂症』
河出文庫、2010年

山森裕毅
『フェリックス・ガタリの哲学――スキゾ分析の再生』
人文書院、2024年

村澤真保呂、杉村昌昭、増田靖彦、清家竜介（編）
『フェリックス・ガタリと現代世界』
ナカニシヤ出版、2022年

千葉雅也
『勉強の哲学 来たるべきバカのために 増補版』
文春文庫、2020年

郡司ペギオ幸夫
『やってくる』
医学書院、2020年

國分功一郎
『中動態の世界―意志と責任の考古学』
新潮文庫、2025年

松本卓也
『創造と狂気の歴史―プラトンからドゥルーズまで』
講談社選書メチエ、2019年

精神医療・当事者研究

精神医療における「反」の運動をどのように着地させるかを考えたのが**中井久夫**であった。彼が言っていることは、R・D・レインやドゥルーズ＝ガタリのラディカリズムの翻案であり、しかもそれを日本の精神医療の環境に受け容れやすい「いっけん穏当」な仕方で提示している。

そのような視点から見るならば、**「当事者研究」**をはじめとする**「べてるの家」**の実践のもつ隠れたラディカルさが見えてくるだろう。それらはすべて**「異界」を歩く**ものなのだ。

フランスにおいて**中井久夫**と近い仕事をしたのが、**ジャン・ウリ**である。彼の**「コレクティフ」**概念は、個人の特異性を抑圧することがないような集団を作るという、いたるところに見出すことのできる困難な課題に取り組んでいる。この概念が精神医療以外にも応用可能であることは、それが集団が水平的な「ケア」と垂直的な「セラピー」のあいだを往復しながら運営されるからであり、そのなかで**「〈責任〉の生成」**が生じるからである。

松本俊彦の仕事もまた、**薬物依存症**等の領域においてその困難に取り組んでいる。

中井久夫
『世に棲む患者』
ちくま学芸文庫、2011年

浦河べてるの家
『べてるの家の「非」援助論――そのままでいいと思えるための25章』
医学書院、2002年

向谷地生良
『向谷地さん、幻覚妄想ってどうやって聞いたらいいんですか?』
医学書院、2025年

熊谷晋一郎
『当事者研究――等身大の〈わたし〉の発見と回復』
岩波書店、2020年

綾屋紗月
『当事者研究の誕生』
東京大学出版会、2023年

村澤和多里、村澤真保呂
『異界の歩き方――ガタリ・中井久夫・当事者研究』
医学書院、2024年

ジャン・ウリ(多賀茂、上尾真道、川村文重、武田宙也訳)
『コレクティフ――サン・タンヌ病院におけるセミネール』
月曜社、2017年

國分功一郎、熊谷晋一郎
『〈責任〉の生成――中動態と当事者研究』新曜社、2020年

東畑開人
『居るのはつらいよ――ケアとセラピーについての覚書』
医学書院、2019年

松本俊彦
『薬物依存症』
ちくま新書、2018年

フェミニズム・ジェンダー

言うまでもなく、『生き延びるための思想』は、非日常性（革命）よりも日常性（生き延び）を、というパラダイムシフトを行った名著である。その視点は『いのちの女たちへ』に由来している。フェミニズムは、「今日のように明日も生きる」ための思想であると上野千鶴子はいうが、その発言がどれだけの苦渋の経験を背景としているのかを考えたい。

「生き延びる」という言葉は、その後流行り言葉として消費されることもあったが、しかしその生き延びのなかの「不自由」を描いた『その後の不自由』によって、その凄みを再発見されるべきであろう。

信田さよ子は、上野千鶴子とともに「ひとつの社会がそこに含まれている何か耐えがたいことを突如として見いだし、さらにはそれとは別の可能性をも見いだした」（『ドゥルーズ・コレクション 2』）。信田さよ子の場合、それは医学のなかに場所を占めていなかった「アダルトチルドレン」概念を肯定し、後の『当事者主権』の思想にもつながる実践の礎を築いた。

『斜め論』で論じたように、信田さよ子は単なる臨床家ではなく、理論的・政治的にもきわめて重要なポテンシャルを持っているのである。

上野千鶴子
『生き延びるための思想 新版』
岩波現代文庫、2012年

田中美津
『いのちの女たちへ――とり乱しウーマン・リブ論 新版』
現代書館、2016年

上岡陽江、大嶋栄子
『その後の不自由』
医学書院、2010年

信田さよ子
『なぜ人は自分を責めてしまうのか』
ちくま新書、2025年

中西正司、上野千鶴子
『当事者主権 増補新版』
岩波新書、2024年

六八年五月と「その後」

『斜め論』でも論じた「六八年五月」という「出来事」のもつインパクトと、それをなきものとしようとするネオリベラリズムについてアラン・バディウが語った「六八年とフランス現代思想」は必読である。

このモチーフは、日本における精神医療改革運動や、全共闘運動とその後の流れ（『増補 革命的な、あまりに革命的な』でその意義が強調される華青闘告発等）においても展開することができる。バディウは「六八年五月」は「代表民主制の批判」であったというが、現代思想における民主主義論まで射程に収めた『現代民主主義』の議論が参考になるだろう。

かつて中井久夫は、楡林達夫のペンネームで『日本の医者』なる医局講座制批判のマニフェストを執筆した。これは『斜め論』でいうところの垂直的なシステムの批判である。

中井久夫自身はその後は運動には携わらなかったが、『造反有理』が描き出す精神医療改革運動の軌跡は、現代のメンタルヘルスをめぐる言説を討つために大いに役に立つだろう。

アラン・バディウほか
『1968年の世界史』
藤原書店、2009年

高岡健、岡崎伸郎、古屋龍太(監修)、第4次「精神医療」編集委員会(編集)
『精神医療改革事典』
批評社、2023年

絓秀実
『増補 革命的な、あまりに革命的な』
ちくま学芸文庫、2018年

山本圭
『現代民主主義——指導者論から熟議、ポピュリズムまで』
中公新書、2021年

中井久夫(著)、高宜良(編)
『中井久夫 拾遺』
金剛出版、2023年

立岩真也
『造反有理——精神医療現代史へ』
青土社、2013年

抵抗のために

フーコーの初期の仕事は、精神医療や心理学を歴史のなかで捉えるものであった。さらに晩年の彼は、既存の規範や権力関係に抵抗しながら自らの生を美的に創造する「生存の美学」を論じた。

フーコーの議論の一部が、ネオリベラリズム的なセルフ・マネジメントと見間違えられかねないものでありつつ、しかし抵抗を可能にするものであることは、『斜め論』で論じた当事者研究やハームリダクションにもあてはまるように思われる。

「斜め」とは「自治」ないし「自主管理」のことである、と言ってもよいのかもしれない。「国家をもたぬよう」につとめることは、垂直性を発生させないようにつとめることであり、そこから豊かな実践が可能になるのである。

『コモンの「自治」論』は、それぞれの論者が自らの現場において垂直性に抵抗し、水平性の絶えざるメンテナンスのなかで「コモン」を実現することを教えてくれる。それは近年のアナキズムをめぐる議論にも接近させることができるだろう。

慎改康之
『フーコーの言説』
筑摩選書、2019年

箱田徹
『今を生きる思想 ミシェル・フーコー 権力の言いなりにならない生き方』
講談社現代新書、2022年

斎藤幸平、松本卓也編
『コモンの「自治」論』
集英社、2023年

松村圭一郎
『くらしのアナキズム』
ミシマ社、2021年

小川さやか
『チョンキンマンションのボスは知っている——アングラ経済の人類学』
春秋社、2019年

ピエール・クラストル（酒井隆史訳）
『国家をもたぬよう社会は努めてきた—クラストルは語る』
洛北出版、2021年

編集者インタビュー

「斜め」の理論をひらいていこうとする本書の試みにはどのようなすごみがあるのか。担当編集者・柴山浩紀が語る

聞き手／尾竹 伸（筑摩書房　宣伝課）

――刊行までの経緯を聞かせていただけますか？

（……）前職で担当していた思想系の雑誌『atプラス』で、松本さんに特集から人選までお任せする、責任編集号をお願いしました。松本さんは「臨床と人文知」という特集を組まれて、巻頭には千葉雅也さんとの対談が収録されています。

つづく論文が今回の『斜め論』の第1章にあたる「水平方向の精神病理学へ向けて」で、これはぜひ本にしましょうとご相談したのが２０１６年のことです。

松本さんは、概念を取り出して整理するのが、抜群にうまいんです。そして、その概念を具体的なものに結びつけて解説してくれる。

（……）松本さんから原稿が届き始めたのは、２０２０年くらいです。散発的に、「3章にあたる原稿です」というふうに、原稿を見せていただいていました。

体感的には、２０２０年ごろを境に、世間的にもちょっとモードが変わったように思います。出版業界で言えば、「ケアをひらく」シリーズが毎日出版文化賞（企画部門）に選ばれたのが２０１９年です。ケアという概念が無視できないひとつの前提になっていく、そうした時代の流れのようなものと、この本は歩調が合っている。

――どういうふうに読んでいくといいか、おすすめはありますか？

ぼくのおすすめは、「おわりに」から読むことです。まず、短い。「本書の議論は、きわめて個人的な思いに端を発している」と、この本を書いた動機も書いてあります。松本さん自身に垂直的な傾向があり、かといって、たんなる水平に向かうことにも抵抗があったと。

もちろん、どこから読んでもらってもいいですし、中井久夫が好きであれば2章とか、興味のある章から読めばいいと思います。精神分析の話とか、現代思想に親しんできた方であれば、1章から順に読んでいけるはずです。

ただ、頭からちゃんと読もうと、無理しないほうがいい

かもしれません。途中でやめてもいいし、つまみ食い的に、行儀わるく読んでもらって大丈夫です。そもそも、本は頭から読まなくてもいいわけですから。

現代的な話題としては、3章「「生き延び」の誕生」と4章「当事者研究の政治」がおすすめです。時代を規定するキーワードである「生き延び」と「当事者」について、それぞれの章で論じています。

――自分は現代思想を読んでこなかったので、「水平から斜めへ」ってこういうことなんだということが3章で書かれていて、とてもわかりやすかったです。

（……）「斜め」がどういうことなのか、具体的にわかるのがこの本のいいところですよね。松本さんの文章は、簡単ではないですが、ゆっくり読めばちゃんとわかってくる。そういう意味で、すごく読みやすいと思います。

――いろんな人が自分の立場で考えてみても、気づきがありそうですよね。

自分の仕事とか、ちょっと困っていることに対して、どう斜めの要素を入れるか。そういう感じで考えられると、おもしろいかもしれません。

だから、読んだあとで「斜め」という感覚が残って、どうやったら斜め的にできるかなと思ってもらえるだけで、とてもうれしいです。

（……）「斜め」はとても使いでのある概念なんです。編集という仕事をするなかで、「この本、水平と垂直の具合はどうなってるかな？」というふうに点検することもあります。

ぼくが言っていることが松本さんの考えとちがう可能性はもちろんあるんですが、その誤解も含めて、すごく使い道がある。

本の読み方としても、それでいいと思うんです。正解があるわけではなくて、斜めを自分なりに考えてもらう。「いまの自分、斜めかな？」みたいな（笑）。

そういう、物差し的な使い道がある本だと思います。即効性があるかは微妙なんですが、毎晩ストレッチしてるとだんだん体が柔らかくなるみたいに、日常的に「斜め」を意識するだけでも変化はあるかなと。

そういう意味で、「水平」「垂直」そして「斜め」の概念は、「スキゾとパラノ」あるいは「中動態」のように、読者の思考を刷新するちからを秘めていると思っています。

柴山浩紀（しばやま・ひろき）

1986年生まれ。2010年、太田出版入社。2016年から『atプラス』の編集長をつとめたのち、退社。2017年から筑摩書房。主に人文系の書籍を担当する。担当作に『海をあげる』（上間陽子）、『東京の生活史』『大阪の生活史』（岸政彦編）、『聞く技術 聞いてもらう技術』（東畑開人）、『近代美学入門』（井奥陽子）、『なぜ人は自分を責めてしまうのか』（信田さよ子）など。

『斜め論』
冒頭試し読みはこちら

『斜め論』紀伊國屋じんぶん大賞2026
大賞受賞記念ブックガイド(非売品)
2026年2月発行

『斜め論――空間の病理学』松本卓也

四六判上製／320頁
ISBN：978-4-480-84333-3
発売日：2025年8月7日
定価：2,420円(10%税込)

ブックデザイン：川添英昭

筑摩書房

〒111-8755
東京都台東区蔵前2-5-3
https://www.chikumashobo.co.jp/